

小さな楽しみ「朝ドラ」

2023年12月1日

1 / 3

【はじめに】

これと言った趣味さえも持たない私であるが、小さな楽しみや喜びを探しながら毎日過ごしている状況である。その中でも NHK 連続テレビ小説（以下「朝ドラ」）を見ることが楽しみのひとつである。

調べてみると、朝ドラは、1961(昭和36)年、月曜から金曜まで1年間続く帯番組として始まったものらしい。また当初は20分間の番組だったようだ。

それまでにラジオで数多くの連続放送劇が人気を集めていたことから、長編小説をテレビドラマ化するという新しいジャンル「連続テレビ小説」が生まれた。

朝の時間帯に放送されたのは、新聞の朝刊の連載小説を意識したからとも言われているようだ。翌年1962(昭和37)年には、月曜から土曜まで、朝8時15分からの放送開始というスタイルに変更。放送時間もこの年から15分間になった。

1975(昭和50)年からは、1年間を前期と後期に分けた半年間の放送が基本に。さらに、2010(平成22)年には、放送開始時間が朝8時に変わり、現在の形が確立した。

「朝にドラマを見る」という視聴習慣を生みだし、半世紀以上の間、多くの人に親しまれて続いている。

現在は109作目となる「ブギウギ」が放映されており毎日楽しんでいるわけであるが、当然毎朝欠かさず見ることは不可能であり、その時は録画してでも見るようにしている。最近はNHK プラスもあるし・・・。

ストーリーや演じる俳優も気になるところであるが、「ブギウギ」は、ブギの女王と呼ばれた笠置シズ子モデルにした創作ドラマで、主演は



ブギウギ

水谷豊・伊藤蘭夫妻の一人娘・趣里である。若い頃、キャンディーズの蘭ちゃんファンであった私にとっても趣里がどう演じるのか興味のあるところである。

私も朝ドラが楽しみと言いつつも若い頃から朝ドラを見続けてきた訳ではない。それなりの年齢になってから、「見れる時には見る」状態であったが、笑いあり、涙ありで見ているうちにだんだんハマり始め今では「何としてでも見たい」状態となっている。

これまで私が楽しんできた朝ドラで印象的だった作品について話をすると、まず毎日笑いが絶えなかった作品はなんと言っても88作目の「あまちゃん」である。普通のセリフの中であっても思わず吹き出してしまいそうになった場面は一度や二度どころではない。

また（あくまで私個人の感想であるが）結構心にジーンときたのが64作目の「ちゅらさん」であった。

86作目の「梅ちゃん先生」や99作目の「まんぷく」もとても人間味があり面白く、朝から気分が良くなったものだ。



あまちゃん

小さな楽しみ「朝ドラ」

2023年12月1日

2 / 3

そのほかの作品についてもその都度感じることは多々あった訳であるがそれをツラツラ書き綴っても仕方が無いので、私の中で特に楽しませてもらった102作目の「エール」について語ってみたい。



ちゅらさん



梅ちゃん先生



まんぶく

【エール】

モデルは言わずと知れた昭和の大作曲家「古関裕而」である。

ドラマでは、少々ぼんやりしていて、周りには取り柄がない子どもだと思われていた主人公が、音楽に出会いその喜びに目覚めると、独学で作曲の才能を開花させてゆく様子が描かれている。

不遇の時代を乗り越え、夫婦二人三脚で数々のヒット曲を生み出していくが、時代は戦争へと突入し、軍の要請で戦時歌謡を作曲することになるなどの苦悩も描かれている。自分が作った歌を歌って戦死していく若者の姿に心を痛める主人公。そして戦後、混乱の中でも復興に向かう日本で、傷ついた人々の心を音楽の力で勇気づけていく。

またドラマ内ではあの志村けんが一部に登場し最後の姿を見せたことでも話題になった。

実際古関裕而の類い希なるズバ抜けた才能には感心するばかりであり、まさに日本の宝だと言えるのではないだろうか。



エール

「古関裕而」

生涯で作曲した数は5000曲に及ぶらしい。

それにしても誰もが間違いなく聞いたことのある曲をよくもまあこれほど・・・と感心するばかりである。

有名なところでは、「東京オリンピックマーチ」や「栄冠は君に輝く」

また、阪神タイガースの「六甲おろし」、読売ジャイアンツの「闘魂こめて」、中日ドラゴンズの「青雲たかく」

早稲田大学や慶應義塾大学の応援歌、校歌に至っては300曲以上・・・等々

加えて懐メロの部類に入るのであろうが、「高原列車は行く」や、私と同姓同名の藤山一郎が歌ったという妙な親近感もある「長崎の鐘」、「夢淡き東京」など。



古関裕而

小さな楽しみ「朝ドラ」

2023年12月1日

3 / 3

そして、先に述べたが、苦悩の中で作曲せざるを得なかった軍歌においても、「暁に祈る」、「若鷺の歌」、「露営の歌」など

カラオケは得意ではない私だが、歌うとなれば恥ずかしながら古い歌しか歌えなくて、中でも、最近ほとんど無いが、もう少し若い頃には懐メロや軍歌を好んで楽しんでいた時期もあったことが「エール」にハマってしまった一因であったかも知れない。

軍歌に関しては、とても勇ましくてリズムカルなメロディーとなっており、当時の人々にとっても口ずさみやすかったのではなかろうか。

「古関裕而」はもちろん作曲家であるが、ここで少し視点を変えて、特に軍歌の作詞・歌詞について考えてみたい。戦争という時代背景は当然あるのだろうが、現代では考えられない歌詞が世間から求められていたと思うと複雑な心境になることもある。

一部を紹介すると

「腕はくろがね、心は火玉」

自分の身体をいったい何とと思っているのか・・・これも時代背景か！

「大和魂には敵はない」

強い気持ちや根性さえあれば・・・これも時代背景か！

「見事轟沈した敵艦を母へ写真で送りたい」

家族を思う気持ちと戦っているという誉れ・・・これも時代背景か！

「夢に出てきた父上に、死んで還れと励まされ」

どこが励まされているのか、こうなると意味も分からない・・・これも時代背景か！

【おわりに】

後半の部分はやや今回の題名からそれてしまったが、要するに私の小さな楽しみである「朝ドラ」は、間違いなく一日の活力源の一助となっているのは間違いならしい。

これから先、何作目まで楽しめるかは解らないが、これからも「朝ドラ」に限らず小さな楽しみ・喜びを模索しながら生活していきたいと思っている。

【今回のひと言】

人生とは自転車のようなものだ。

倒れないようにするには走らなければならない。

(敬称略、写真はNHKのHP等より引用した。)

藤 山 一 郎